

Arthur Miller

アーサー・ミラー全集Ⅳ 倉橋 健訳 早川書房

訳者略歴

大正8年東京に生る 早稲田大学文学部英文科卒

現在、早稲田大学文学部教授、演劇博物館々長

主著書「現代アメリカ演劇論」(南雲堂刊)

「演出のしかた」(三省堂刊)

主訳書「スタニスラフスキ演出教程」(未来社刊)

「サローヤン戯曲集」共訳(早川書房刊)

編書「シェイクスピア辞典」(東京堂刊)

検 印
廃 止

アーサー・ミラー全集 IV

昭和四十九年三月二十日 初版印刷
昭和四十九年三月三十一日 初版発行

著者 アーサー・ミラー

訳者 倉 橋 健

発行者 早 川 清

発行者 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町二ノ二

印刷 株式会社浩文社 製本 株式会社明光社

定 価 一六〇〇円

(C) 1974 by 早川書房

目次

代 価（二幕）……………三

二つの月曜日の思い出（一幕）……………一六三

あとがき……………二六三

THE PRICE
and
A MEMORY OF TWO MONDAYS

by
ARTHUR MILLER

Copyright © 1968, 1955, by
ARTHUR MILLER

Translated by
TAKESHI KURAHASHI

Published 1974 in Japan by
HAYAKAWA SHOBO & CO., LTD.

This book is published in Japan by arrangement
with INTERNATIONAL FAMOUS AGENCY, INC., through
CHARLES E. TUTTLE CO., INC., TOKYO.

翻譯權独占

代

価

登場人物

ビクター

エスター

ウォルター

ソロモン

第一幕

現代。ニューヨーク。

舞台奥に窓が二つ。建物の取壊しにそなえて、あざやかに水漆喰で×印をつけられた煤けた窓ガラスから、日光がさしこむ。

天井の明り窓からも、薄汚れた窓ガラスを通して、日の光がにぶく、にじみ出ている。上からの光はまず、舞台中央の詰め物をしすぎた感じの安楽椅子の上にあたる。椅子には、褪せたバラ色の椅子覆いがかかっている。そのそば、右手には、一九二〇年代の箱型のラジオと古新聞がのった小さなテーブル。そのうしろにブリッジ用ランプ。その左手には旧式の手巻き型蓄音機とレコードの山が、低いテーブルの上にのっている。そばに、白い布巾とモップとバケツ。

部屋の中がだんだんに見えてくる。安楽椅子のあるあたりだけが、数脚の椅子や片袖長椅子にかこまれて、生活の匂いをただよわせている。このあたりのほかは、部屋の両側も奥も、壁いっぱいにぎりぎりに家具がうずたかくつまれており、十部屋分の家具をこの一部屋に押しこんだような混沌状態である。

床のあちこちには、片袖長椅子が四つと小型長椅子が三つ、乱雑に置かれている。その他

いくつかの安楽椅子や袖椅子ウイング・バツの類、寝椅子ダイバシが一つに予備の椅子など数脚。床から三方の壁いっぱいには天井際まで、鏡台つき化粧だんす、大型衣裳だんす、書棚のついた書き物机、張り出し戸棚、こった彫刻をほどこした給仕用テーブル、サイド・テーブル、読書用テーブル、デスク、ガラス戸付き本棚、前面が弓型に張りだしたガラス戸棚その他がつんである。ぐるぐる巻いた長い絨緞が数個、短か目のがいくつか。ポートの長いオールが一本。寝台の枠やトランクが若干。頭上にはクリスタルのシャンデリアが大型のと小型のが一個ずつ、電線には接続されずに、天井からロープでつりさげられている。十二脚の食堂用椅子が左手の食堂用テーブルにそって一列に並んでいる。

これらの家具には、豪華な重厚さ、いわばドイツふうともいふべきものが感じられる。壁際に並ぶ、前方にふくらみをもった戸棚や丸みをおびた用だんすには、時代の重みがある。部屋はおそろしく混み合い、ぎっしり詰っていて、いたいこれらの道具類がほんとうにいいものなのか、それとも単にこけおどかしのつまらないものなのか、判じがたい。

金色の塗料がはげかけたハープが一台、覆いなしで、舞台前方右手に置かれている。その奥には、色がとくに褪せた間に合せ物らしいカーテンのかけに、小さな流しとレンジと旧式の冷蔵庫がみえる。右手奥寄りには、寝室へのドア。左手前にもドアが一つあり、これは廊下と階段へ通じているところ。

われわれは今、やがて取壊されようとしている、マンハッタンの、とある褪色砂岩ブラウン・ストーンでつくられた建物ビ社の屋根裏にいたのである。

左手前のドアから、巡査部長のビクター・フランツが制服姿ではいつてくる。部屋の中へ

はいって立ちどまり、見まわし、なんとなく二、三步歩き、そしてまた立ちどまる。無表情に、だがこの部屋から発散される何かにうたれたように、そのスフィックスの謎めいたふしぎな雰囲気引きつけられ、視線を一点から一点へ、一つの品から他の品へと移す。まるで柩へ向うような、あるおごそかな態度でハープに近づくと、その前に立ちどまり、手を伸ばして絃をはじく。むきを変えて、食堂用テーブルのほうへ横切ってゆき、拳銃ベルトをはずし、上衣をぬぐ。そしてテーブルの上にさかさまにのついていた三脚の椅子の一つをおろして、その上にベルトと上衣をかける。

腕時計をのぞき、時間がたつのを待つ。それから、蓄音機の前につんであるレコードの山に視線をおとす。蓄音機のふたをあけ、回転盤の上にすでにレコードが一枚のついているのを見て、クランクをまわし、プレーヤーのアームを音盤の上におく。ギャラハーとショーンが歌う。その甘い郷愁をさそうような歌いぶりに、彼はほほえむ。

レコードをかけたまま、家具にたてかけられている長柄のオールのところへゆき、それにさわる。そこで何かを思ひだし、用だんすのところへゆき、中からフェンシングの試合用の剣と面を取りだす。なつかしそうな色を目にうかべ、剣を空中で鳴らしてみる。剣と面をテーブルの上におき、つんであるレコードを二、三枚さがす。一枚のタイトルが、彼の顔に微笑をひろげる。ギャラハーとショーンの盤をそれとかけかえる。「笑いのレコード」である——二人の男が、ヒステリックに笑い声をたてながら、なんとか一つの文を終りまで言おうとするが、笑いに消されてためである。

彼はほほえむ。微笑はだんだんひろがり、くすくす笑いとなり、ついに本当に笑いだす。彼は笑いの虫にとりつかれたように、げらげら笑う。どうしようもなくなり、身をよじり、

腹をかかえて笑いこける。

妻のエスターが左手前のドアから登場。彼は彼女のほうに背をむけている。だれが彼といつしよになつて笑つてゐるのかとあたりを見まわしながら、彼女の顔にはすでに微笑がなかば浮びかけてゐる。彼女が彼のほうへ行きかけたとき、靴音で、彼がふりかえる。

エスター　いつたいなんなの、それ？

ビクター　（びっくりして）やあ！　（ちよつとバツがわるそうに、微笑をうかべながら、蓄音機のアームをあげる）

エスター　まるで、パーティでもやつてゐるみたい！

ビクターは彼女に軽いキスをする。

（レコードのことを）あれ、なんなの？

ビクター　（あからさまな非難とならないように氣をつけながら）どこで一杯やつてきたんだい？

エスター　言つといたでしよ、健康診断してくるつて。（わざとのようにはしたなく笑う）

ビクター　ちえつ、とんだお医者さまだ。飲んではいかんと、お医者さんにいわれたはずだろう。

エスター　（笑う）一杯だけよ！　一杯ぐらい、どうつてことないわ。ともかく、万事異常なし。あんたによろしくつて。（見まわす）

ビクター　それなら結構。そろそろ道具屋がやってくるころだ、何か取っておく物があれば――

エスター　（溜息をついて、あたりを見まわして）ほんとに――昔のままね。

ビクター　あの婆さん、なかなかうまく片付けておいてくれたな。

エスター　そうね――こんなにきちんとしたことで、なかったわ。（部屋をさして）おかしな気にならな

い？

ビクター　（肩をすくめて）いや、別に――彼女、おれが判らなかつたからなあ。

エスター　ほんとうに、百五十年ね。（まわりを見まわしながら、頭をふって）ふうーっ。

ビクター　何が？

エスター　時の流れ。

ビクター　そうさな。

エスター　何か、違った感じ。

ビクター　いや、昔のまんまさ。（部屋の片側をさして）あそこにおれの机とベッドがあつたんだ。あとは

同じさ。

エスター　以前はいつも、これがみんな、ひどくもったいぶって、ブルジョワ趣味に見えたのね。でも、風格はあるわ。この中には、またはやってきてるものもあるらしいわ。おかしなものね。

ビクター　で、何か取っておくかね？

エスター　（見まわして、ためらう）こんなの、そばに置いておく気になるかしら。みんな、すごくがっし

りしていて——どこに置けるかしら？ あなたんす、すてきね。（そのほうへ行く）

ビクター おれのだったんだ。（部屋の向う側のもう一つのをさして）向うのが、ウォルターのさ。対になつてゐるんだ。

エステル （見くらべて）ほんと！ 連絡はついたの？

ビクター （それが問題であつたかのように、やや視線をそらして）今朝また電話したんだが——診察中だった。

エステル いたことはいたの？

ビクター ああ、看護婦が取りつきに行つたから——でも、どうだっていいさ。一応知らせておけば、あとはこつちで事を運べるんだ。

エステルは、何かいいたいのをおさえて、ランプを手取る。

そいつは、多分ほんものの磁器だぜ。寝室においたら、いいかもしれんな。

エステル （ランプを下において）どうして、どこかよそで落合ふことにしなかったのかしら。どれもこれも、見てると気がめいっちゃう。

ビクター なぜ？ すぐすむよ。まあ、こつちへ来て、かけたらどうだい？ 道具屋はすぐ来るよ。

エステル （片袖長椅子に腰をおろしながら）ここは、なんだか、ひどく微臭いのよ。まったくやりきれな

い。いつもそうだったわ。神経がいらいらするばかり。

ビクター まあ、そう気をたてるなよ。これ売りさえすれば、けりがつくんだから。そうそう、切符は取ってきといたぜ。

エスター そう、よかった。（頭をうしろへもたせかけて）いい映画だといけど。

ビクター いいなんてもんじゃない、すばらしいにきまつている。一枚二ドル五十だ。

エスター（突然反抗的に）どうだっていいわ、そんなこと！ どこかへ行きたいのよ。（まわりを見まわして、それ以上の反応はしぼんでしまう）ほんとうに、どうなっているの？ 今、階段をあがってくるとき、どのドアもみんな開けっ放しになっていたわ——とても、ここに——

ビクター 古い建物は毎日取壊されてゆくのだ。

エスター それはわかっているけど、でも、まるで百も年をとったような気がしてくるわ。からっぽの部屋って、大きらい。（物思いにふける）あのおかしな男、なんて名前だったかしら？——表の客間を借りてた……おぼえてる？——サキソフォンを修理していた？

ビクター（微笑して）ああ、ザルツマンだろう。（片手を横のほうへ伸ばして）片方の目がこっちの方を向いていた——

エスター そうそ！ あたしが階段をおりてゆくと、きまって待ち伏せして、しつこいたらありやしなかった！ あんなきれいな女の子たちを、どうやってものにしたのかしら。

ビクター（——笑う）さあね。きっと匂いがよかったんだろ。

エスター、笑う。彼も笑う。

まったく、あいつつたら、ときどきここまで駆けあがって来て、昼日中だというのに——「ビクター、早いところ、おりてこい、あまつてる娘がいるぜ！」だって。

エスター　で、おりてったのね、あんたも！

ビクター　そりゃあそうさ。ただなものな。

エスター　（赤くなって）今まで一度もいかなかったわね。

ビクター　だって、おまえよりも前のことだものな。ほとんどは。

エスター　いやな人。

ビクター　だってさ、なにしろ不景気の時代だったんだからな。

エスター、筋の通らない理屈に笑いだす。

いや、本当さ——みんな、つき合いがよかった——昼間っからアレにおはげみというわけで。マクローリン姉妹にしても——おぼえているだろ、表側の寝室に住んで、タイプの賃仕事をしていた？（笑う）おやじがよく言っていた、「あそこに仕事をたのむと、一枚二ドルにつく」って。

エスター、笑う。しかし、笑いはきえる。

エスター みんなもう、死んでしまったわね、きっと。

ビクター ギルツマンは多分な——いい年だったから。もともと——（彼は頭をふり、おどろいたように、静かに笑いだす）おどろいたな、あいっだって、それほど年じやなかったんだぜ、あのころ——考えてみると……今のおれとおつつかっただ。へえ！

あらためて時の流れの速さにつまされて、二人は一瞬黙って顔を見合わせる。

エスター （——立ちあがり、ハープのところへ行き）ところで、その道具屋さん、どこにいるの？

ビクター （腕時計をちらつとのぞいて）六時二十分前か、もう来る頃だな。

エスター、ハープを爪弾く。

そいつは、ちょっとした物だと思うな。

エスター ここにはまだほかにいろいろなあるわよ、値うちのものが。いいこと、駆け引きしなきゃだめよ。

言い値で手を打ってはだめよ——

ビクター（抗議したいところをやっとおさえて）おれにだってできるさ、駆け引きぐらい。心配しなさんな。投げたりはせんよ。

エスター 相手はそこが付け目なんだから。

ビクター 今からくよくよするなよ。まだ、始まってもないんだ。おれは堂々とやるつもりだ。ああいう手合いの扱いかたは、ちゃんと心得てるよ。

エスター（——それ以上議論するのは思いとどまり、蓄音機のところへ行く。わずかに気分をひきたてようとして）このレコード、なんなの？

ビクター 「笑いのレコード」さ。二〇年代には、大した人気だった。

エスター（ふしぎそうに）おぼえているの？

ビクター ぼんやりとだけど。まだ五つか六つの頃だった。パーティで、よくかけたもんだ。ほら——だれがいつまでもまじめな顔をしていられるかっていうあれ。それとも、ただまわりに坐ってみんなで笑ってただけかな、よくおぼえていないけど。

エスター すてきな思いつきじゃない、それ！

二人の関係は、まずはうまく均衡が保たれている。彼はエスターのほうへ向きなおる。